

平成26年度 中四国学生剣道連盟
リーダーセミナー報告書

「中四国を担うリーダーとしての資質の向上を図る」



平成27年3月7日(土)～9日(月)

於 国立江田島青少年交流の家

担当 中四国学生剣道連盟副幹事長 谷本 悠樹

はじめに

去る、平成 27 年 3 月 7 日から 9 日にかけて、広島県江田島市にある国立江田島青少年交流の家において平成 26 年度の中四国学生剣道連盟リーダーセミナーが開催されました。今回のセミナーは例年の参加人数と比較してみても、大変多くの参加をいただき盛大なセミナーとなりました。

今回のセミナーは香川大学の山神眞一先輩をはじめ、中四国学生剣道連盟の先輩方のご指導のもと、中四国学生剣道連盟の学生役員を中心に運営を行いました。その詳細についての報告書を、今回実行委員を務めさせていただきました香川大学剣道部の谷本悠樹、井内香里を中心に作成させていただきましたので、ご査証のほどよろしく願いいたします。

実施概要

日程：平成 27 年 3 月 7 日（土）～9 日（月） 2泊3日

会場・宿泊：国立江田島青少年交流の家

広島県江田島市江田島町津久茂1-1-1 TEL 0823-42-0660

主催：中四国学生剣道連盟

主管：広島修道大学剣道部

担当先輩役員：山神眞一先輩、榎 康守先輩、村井慎治先輩、香川直己先輩

廣畑栄三先輩、石井博貞先輩

実行委員：谷本悠樹（実行委員長：香川大学）他、中四国学生剣道連盟学生役員 10 名

参加人数 男子 77 名 女子 37 名

第 1 日目 実技研修

リーゼミ初日の実技研修の時間では主に、ホワイトボードを用いた講習会とコミュニケーション能力を高めることを目的としたゲーム、地稽古を行った。

ホワイトボードを用いた講習会では、「五常について」や「武道の特性」、「剣道の特性」などについての話を聞いた。これらの話に正解はなく、山神先生からの質問に学生が答え、最後に山神先生自身の考えを聞くという形式がとられた。仁・義・礼・智・信という五常を竹刀の節に喩えたり、剣道と柔道の違いについて考えたりと、日頃あまり考えないようなことを考えさせられ、学生にとっては貴重な体験になったと思う。

その後もまだ面は着けず、二人一組または三人一組となり、コミュニケーション能力を高めるとともに、中四国の大学から次期主将、副主将候補が集まっているということでお互いに仲良くなることを目的とした簡単なゲームをいくつか行った。握手した状態でジャンケンをし、勝った者が負けた者の手を軽く叩いたり足を踏んだりするのに対して負けた者は叩かれたりしないように避けるような内容のゲームや、山神先生が考えられた「剣道ジャンケン」という一風変わったゲームなどをした。これらのゲームにより参加者の緊張も解け、お互いに打ち解け合っていたように感じる。中には男女混合のグループを作って

行うようなゲームもあり、性別関係なくコミュニケーションをとれていたと思う。

次に、全体で稽古を行った。榊先生、山神先生、村井先輩にも元立ちに立ってもらい稽古をつけていただいた。今までのゲームの時間が嘘のように稽古が始まった途端体育館全体の空気が引き締まったと感じた。初めて剣を交える者や以前から面識のあった者、かつてのチームメイトや先輩後輩関係にあたる者同士など、参加者は様々な人と稽古ができたと思う。特に日頃している稽古相手とは全く違う相手と稽古をした参加者は、その相手と稽古をしたことで学んだことも多かったであろう。

あくまで中四国学生剣道連盟員として稽古に参加したが、自分自身学ぶことの多い稽古内容であった。



(金築佳佑)

パソコン研修

また、一日目午後の実技研修と平行で学連OBの石井先輩のご指導の下、各大学の主務によるパソコン研修を行った。現在中四国学生剣道連盟では、大会への参加申込みや部員登録

をインターネットを活用して行っている。各大学はそれぞれ連盟に登録されている大学のメールアドレスなどに連絡を受け、そこから期日までに選手登録や諸連絡を連盟本部とやりとりしながら大会に向けて準備を進めていく。しかしながら、各大学の主務は一年ごとに交代するため、先輩から後輩へうまく引き継ぎが行われず、期日に間に合わないという

ことも稀にある。そこで、代替わりが行われやすいこの時期にパソコン研修を行い、連盟のさらなる円滑な運営を目指している。今回のパソコン研修には多くの大学が参加し、このシステムを理解したことであると思う。来る、5月の選手権大会ではこのリーゼミで学んだことが生かされ、スムーズな準備が行えることを願う。



(谷本悠樹)

1日目夜 シンポジウム

リーダーズセミナー一日目、香川大学剣道部山神眞一先生による、シンポジウムが行なわれた。リーダーとなる者にとって重要な要素を、ユーモアを交えてお話くださり、終始和やかな雰囲気でのシンポジウムとなった。まず、導入として、新聞を使った活動を行なった。「平成26年度中四国学生剣道リーダーズセミナー」というタイトルで使われている一文字一文字を見つけるということを行い、周りに座っている者と協力しながら必死に新聞の隅々を読んだ。見つけようという気持ちで探してみると、意外にもその多くが見つかり、見ようとしないと思えないけれども、見ようとすれば見つけられるものがあると気づくことが出来た。

次に、三つの「〇をかける」についてのお話だった。その三つの言葉とは、「気にかける」、「眼にかける」、「声にかける」というもので、組織の上に立つにあたって、非常に重要なことを表したものであると感じた。「いつもと様子が違うな」と相手の変化を「気にかける」ことができるのは、常日頃から、その人のことをしっかりと見てあげていないとできないことである。「眼にかける」ことについては、「眼」という漢字は、「愛情深いまなざし」という意味があり、そのような気持ちを持って人と接することの大切さを説かれた。三つ目の「声にかける」とは、二つの「〇をかける」を行動に移したものである。いくら「見ている」といっても、その気持ちが相手に伝わっているかどうかはわからない。実際に「声にかける」という行動をとることで初めて思いが伝わるといこともあるだろう。これらのことを実践してみることがポイントだろう。

その後、大学生として剣道をする上で必要であり、磨くべき資質についてお話された。

それは、Vitality(元気、やる気)、Speciality(専門性)、Originality(独創性)、Personality(人間性)である。これらのことから共通して見えてきたことは、「能力よりも人柄を」ということである。剣道をする意味は、ただ単に技術を向上させることにあるのではない。剣道を通じて、人間性を磨くことに意味があるのである。技術、そして人間性を磨くために欠かすことの出来ないことは、「やる気」、「努力」、そして「工夫」である。「工夫」次第で、練習時間が短くても、環境が整っていないくても、強くなることができるのである。生じる実力の差は、この「工夫」によるものであると考えさせられた。

最後に、山神先生の研究されている分野である「スポーツコーチング」についてのお話があった。先生が考えられる、指導者の役割について様々なことを学んだ。特に印象深かったことは、心理学者アドラーの「ほめる」と「勇気づける」の違いについてである。「ほめる」とは、縦の関係でされることである。一方「勇気づける」とは、横の関係である。ここでは、「勇気づける」ことに注目し、レベルを上げる時にも、このことが重要であるとおっしゃっていた。「相手が自分で自分を結果的に勇気づけられるように勇気づける」というように、相手の事を考えて言葉を発することが、リーダーとして求められているように感じた。

以上のような、楽しくも非常に学生の上に響くシンポジウムとなり、充実した時間となった。きっとリーダー達は、ここで学んだことを持ち帰り、実践してくれることだと思う。

講師をしてくださった山神先生には心から感謝申し上げます。



(井内香里)

二日目午前 実技研修

二日目午前の部は一日目に引き続き山神先生による実技研修であった。まずは、全体で「わっしょい」という大きなかけ声とともに体育館内を何周か走り、そのあと円になり準備体操をした。準備体操では大学、男女、ともに異なる四人グループをその場で作りリズムゲームを取り入れる場面もあった。

次に竹刀を持ち同じグループ内で二人組を作り対面しての素振りを行った。正面素振り、

片方が人が目を閉じて正面素振り、もう片方が人が目を閉じて正面素振りをし、そのあと跳躍素振りも同様に行った。片方の人だけ目を閉じた素振りでは相互に間合いを考えることと目を開けている人が相手の動きを考え動くことが重要となった。

面をつけてからは切り返しと面打ちを重点的に行った。切り返しについては、はじめの面から次に面を打つまでに切らないことと、受ける相手の身長に関係なく相手の面の高さまでしっかり打ち切ることがポイントであった。面打ちでは、大きく振りかぶって面打ちや遠間から一步入っての面打ち、自分が思う間合いまで入っての面打ち、など様々なパターンに分けて行った。途中から、受ける側は相手にアドバイスをするというのも取り入れられた。指導をするときは、まず褒めることから入る。例えば、面打ちであれば「思い切って、しっかりとした打ちができていて良いと思う。」と先に相手の良いところを述べた後に、「でも少し右手が強いから、意識してみるともっと良くなると思う。」とアドバイスを加えるといいと、学んだ。チームの上に立つ者として受けるときでも、ただ受けるのではなく打つ前の相手の動きであったり、竹刀の動きであったりをよく観て伝えることが大事だと感じた。

この実技研修を通して、リーダーとしての自覚を持つとともに重視すべきところや指導にあたる要点などを考えられ、また他大学との交流を通して自分の大学内だけでは学べなかったようなことも学べたのではないかと思う。



(小松 未佳)

午後 審判研修

中四国学生剣道リーダーズセミナー2日目、午後の稽古では審判講習会を行った。この講習会は、審判をする際の正しい作法、動き方を身につけることで審判態度の改善を図り、1本の基準を統一することで誤審を減らし、よりよい試合を行うことができるようにするということを目的としている。審判の判断によって試合の結果は左右されるため、審判は重大な役割である。今回、各大学のリーダーが集まっているこのリーダーズセミナーで審判

講習を行うことで、リーダーたちに審判者としての心得、作法を学んでもらい、それを各大学に持ち帰り部員に伝えることによって、中四国地方の大学剣道における試合の質の向上が見込めると考えている。

はじめに、山神先生からやめをかけるときは腕を垂直に上げる、審判旗は白色の旗を赤色の旗で見えないように巻くなどの審判を行う際の基本的な注意点を指導していただいた。その時、前の審判との入れ替わり方法についても説明していただいた。審判を交代する場合は前の審判が左を向いて歩き出したと同時に次の審判が右足から入る。審判を行う際の注意点を指導していただくことはあるが、入れ替わり方法は教えていただく機会は少ないため、正確に知っていた者が少なく今回の講習が学ぶよい機会になったと考えられる。

その後男子 3 グループ、女子 1 グループの計 4 グループに分かれ、それぞれのグループに 1 人ずつ先輩方についていただき、講習を行った。学生は 3 人 1 組の形態を作り、順番にその組で試合と審判を行った。審判をする上で最も大切なことは審判 3 人の位置取りである。主審、試合者、副審で基本的に主審を頂点に二等辺三角形を作らなければならない。主審を起点として試合者の延長線上に副審がいるという形である。この形を試合者が動く中で保たなければならない。そのためには審判者は試合者の動きを予測しながら動く必要がある。このことは多くのグループで指導されていた。特に、副審は主審の動きに合わせて動くため試合者のことだけでなく主審の心の動きにも注意しなければならないという指導もあった。試合中どうしても審判が 1 人入り込めず、3 人とも同じ場所にかたまってしまった場合はやめをかける。このように審判を行う時の位置は非常に重要である。また位置取りだけではなく、審判者の作法も多く指導していただいた。副審は最初に位置に向かうときは開始線の内側を通る。審判旗は体側につける。立っているときはかかとを付け、つま先を軽く開く。これらの基本の所作でも意識的に行わなければ蔑ろになってしまうため、注意される者も多く見受けられた。さらに、1 本だと思うか、そうでないのか自分の意思をはっきりと示す、1 本の基準は試合者の練度にあわせるといった 1 本についての指導もあった。この指導によって自分の中で 1 本の基準を明確にしておくことの必要性を再認識させるものになったのではないかと思う。

講習会は午後だけであったが、学生たちは短い時間で集中して学び、実践することで身につけ翌日のリーゼミ選手権で指導していただいた成果を発揮できていたと感じた。

(三浦和紗)

二日目 学連員パソコン研修

リーダーゼミナール二日目。私を含め中四国学生剣道連盟役員 4 人は石井先輩ご指導の下、パソコン研修を一日行った。目的として、今後の大会運営をより円滑にすると同時にホームページなど多岐にわたりよりよいものにしていくため。研修内容は、午前中にそれぞれが今後活動に必要なアプリをインストールし、その使用方法について説明を受けた。

主に中四国学生剣道連盟のホームページの編集についてである。愛媛大学役員は選手権について、岡山大学役員は優勝大会について、広島大学役員は新人戦について、香川大学役員はリーダーゼミナールの割り振りでそれぞれが真剣に作業を行った。大会要項や試合結果などの掲載の仕方を学んだ。ホームページは数多くの人が閲覧するので、正確な情報を掲載しなければならない。そのために、しっかりと確認し間違っただまにしないことが重要だと学んだ。また、ホームページを通して多くの人に中四国学生剣道連盟の活動について知ってもらうために工夫が必要だと感じた。

(山之内 智哉)

リーゼミ選手権

このゼミナールの最終日には、実技研修、審判講習のまとめとしてリーゼミ選手権を行った。チーム編成は男子2名女子1名の3人制で、メンバーは前日の懇親会でくじ引きを行い決定し、大学も異なるメンバーで試合を行った。

当日の朝、試合前のアップも各チームで行うはずであったが、面をつけてアップを行ったのは1チームのみであった。そこで村井先輩から開会式の前に「試合に向けての準備ができていない」というご指導をいただいた。確かに、このゼミナールの参加者は、各大学の次期主将である。つまり、その大学を今後引っ張っていく人間である。たとえ、同じチームのメンバーとの面識がなくても、しっかりとコミュニケーションを取り合い、そのチームを勝たせるために最大限の準備を行う。それが人を引っ張るリーダーに求められる資質の一つなのかもしれない。また、村井先輩は広島大学OGで今回の世界大会のメンバーに選ばれた黒河香菜先輩の学生時代のお話をしてくださり、改めてこの中四国のレベルを自分たちが上げていかなければという意識を持った。ちなみにこの面をつけてアップを行った唯一のチームは試合でも上位入賞をした。

試合は、例年以上に盛り上がり、普段対戦校である相手と同じチームで戦えるのは心強いなどという声もあった。真剣な戦いの合間にも笑顔が見られるのがこのリーゼミ選手権の良いところではないかと私は思う。

決勝に駒を進めたのは、竹内(香川大)川上(福山平成大)嶋村(広島大)チームと、又吉(高知大)林田(香川大)浅田(環太平洋大)チームであった。先鋒は女子同士の対決となり、竹内選手が気迫の攻めで又吉選手に2本勝ちし、チームに勢いを与えた。しかし続く中堅戦、林田選手が川上選手から2本を奪い、スコアを振り出しに戻した。大将戦は嶋村選手と浅田選手との対戦。中四国でも上位で活躍する2人の選手の試合に、和やかな雰囲気だった会場も水を打ったように静まりかえっていた。結局時間内に勝負がつかず、代表決定戦に。選手は会場のほとんどの選手が期待していた通り、両チームの大将が再び対戦。試合時間2分を過ぎた頃、嶋村選手の引き面が決まり優勝が決まった。

私自身、3年間このリーゼミに参加しているがこれほどまでに見ている者に刺激を与えるような決勝戦は初めて見た。他の学生たちにとっても、今後この選手たちに中四国の大会

で戦うための刺激となったのではないかと思います。



(谷本悠樹)

アンケートからの意見と来年度への課題

・江田島が地理的に不便であり、前日から宿泊を強いられる大学があり、また交通費の面でもかなり負担がかかるので、他の施設を検討してみては？

→中四国学生剣道連盟では、他連盟の参加費に比較すると、参加費が安いので、施設を変更する場合は、それに伴い参加費の引き上げも視野に入れる必要がある。

・懇親会でのマナー

→例年数名の学生が、飲酒の度合いが強すぎて他の団体や部員に迷惑をかける事例が生じている。対策としては配布する酒の量を減らす、一人あたりの酒の量を明確に決めておくなどを考えていきたい。

・直前のキャンセルにおいて

→今回、いくつかの大学から直前の参加キャンセルがあった。理由としては法事、大学内でウイルス感染などがあったが、特に理由もなく不参加の学校があった。毎年伝えている通り、本セミナーは中四国学生剣道連盟の加盟大学は参加必須となっている。また直前キャンセルの場合、食事代などがキャンセルできない場合もある。その為、このような事例に対し明確なルールを設け、来年度すべての加盟大学が参加することを目指す。